



堀田力さん・細川佳代子さん

いまこそ「連帯と絆」のある心温まる社会に

AJOSC 新会長に就任された堀田力さんと、日本にボランティアの花を咲かせ続ける細川佳代子さん。東日本を襲った未曾有の大震災からの復興に向けてボランティアが果たす役割について話し合っていました。

ボランティアのスイッチをオンに

堀田 検察の世界からボランティアの世界に入って20年になりますが、この間、政治も経済も停滞するなかで目覚ましく伸びた唯一の分野が、ボランティアではないかと思えます。「自分たちでやるんだ」という市民の動きが、どんどん広がってき

ました。それが、この20年の実感です。

細川 本当に、その通りだと思います。人間はボランティアの遺伝子、DNAを持って生まれてきているという考えがありますが、私はその考えに大賛成。人間という生きものは、誰かの役に立ったときに非常に幸せを感じる。そういう感情が遺伝子に組み込まれています。では、ボランティアをやる方とやらない方の違い

は何かというと、そのスイッチがオンになっているか、オフになっているかの違いだけなのです。

堀田 私は仕事一本の人間でした。その意味では、ボランティアのスイッチが、なかなかオンにならなかった。ただ、40代に3年半、アメリカの日本大使館に出向しましたが、そのときにワシントンDCの郊外に住んでみて、住民のみなさんがすばらしいコミュニティを作っていることに感心しました。日本でも、ご近所さんが支え合う、温かなふれあいのある地域社会が築けないものかという思いがいつも胸にあった。それが私のボランティアの原点です。

細川 これは母から聞いたことですが、私のボランティア初体験は、1歳のとき。毎朝、お隣の老夫婦の家にハイハイして行って、リウマチで寝たきりのおばあさんの寝床に入って遊んでいたそうです。きっと、おばあさんの喜ぶ顔がうれしかったのでしょうね。それ以来、私のボランティアのスイッチはオンになりっぱなしなんです。その意味でも、小さいとき、若いときからボランティアを通じて人々や社会とつながり、人の役に立って喜んでもらえることが、自分にとっても幸せなことなのだという体験をしておくことが大切です。それは将来、必ず役に立っし、少しでも世の中をよくしていくための大きなポイントだと思います。

堀田 阪神淡路大震災のときに現地で仲間たちと活動しましたが、本当に多くの若者たちがリュックを背負ってやって来る。聞くと、「いたたまれなくなって、足が自然にこっちに向いた」という。それがボランティアなんだよという、「ボランティアって、何ですか?」。実は、あのころはまだ、ボランティアという言葉が知れ渡っていなかった。言葉は知らないが、そこに困っている人がいるから助けなくてはいけない、そうしないといたまれない、というも遺伝子だと思うんです。人は人を助ける遺伝子を持っていると、私もよく人にいっています。

する側、される側の関係を超えて

細川 ボランティアというと、する側、される側と固定的に考える人がいますが、そんな必要はまったくありません。いろいろな方とふれあうことで、出会いがあり、発見があり、気づきがあり、価値観が変わる。する側も、される側も、“ともに”なのです。むしろ、する側が利益を得ることが多い。ただ、「やってあげている」という押しつけはよくないし、見返りを求めるようになったらダメ。それではボランティアではないし、むしろ“善魔”になってしまう。そこは気をつけたいといけません。

堀田 細川さんの活動を見ていて感心するのは、最初から一貫して、

新しいタイプのボランティアに徹しているということ。古いタイプのボランティアというのは、富を持つ者が持たざる者を救済するという、いわばタテ型のボランティア。もちろん、いまでも英米などを中心に、「ノブレス・オブリージュ」という言葉に象徴される旧来型のボランティアがあります。それはそれでいい。でも、する側におごりがなく、される側も決して卑屈になることがない、ともに喜びがあり、幸福があるというのは、新しいタイプのボランティアです。とくに障がい者ボランティアの分野は、どうしても“やってあげる型”になりがちですが、それをお互いさまと、相手の能力や人格を尊重しながらやられているというのがすばらしいですね。

細川 実は私自身、障がい者に対して偏見を持っていた人間でした。福祉に守られるべきかわいそうな人たちであって、本人が安心して暮らせる、親も安心してあずけられる施設や仕組みがあればいいと思っていた。でも、ある牧師さんのお話をうかがって、自分の間違いに気づいたのです。どんなに医学が進歩しても、知的発達障がいの子どもは、人口の約2%の割合で生まれてくる。それは、その子のまわりの人たちに、優しさや思いやりという、人間にとってもっとも大切なものを教えるために、神様がこの世に遣わした存在。この



細川佳代子 (ほそかわ・かよこ)

1942年生まれ、神奈川県出身。上智大学卒。71年、細川護熙氏(元、総理)と結婚。94年、スペシャルオリンピックス日本(現、名誉会長)、世界の子どもにワクチンを日本委員会(現、理事長)、2008年、勇気の翼インクルージョン2015(現、理事長)設立。05年には長野市でのスペシャルオリンピックス冬季世界大会開催に尽力。知的発達障がい者の自立と社会参加を実現する活動など、さまざまなボランティア活動に取り組んでいる。



2010年スペシャルオリンピックス大阪大会 ©スペシャルオリンピックス日本

子たちは、能力や可能性をいっぱい秘めている。ただ、1人ではそれを人に伝えたり、発揮するのが不自由なだけ。だからこそ、この子たちを理解、サポートすることが必要であり、彼らが能力を発揮できる社会こそが、本来のあるべき社会なのだと思えられた。そこで、スポーツを通じて彼らが社会に参加できるよう、スペ

シャルオリンピックスの活動を始めました。
堀田 細川さんたちがそうしてがんばって道を拓いてくれたおかげで、少しずつですが行政も動き始め、介護保険分野や障がい者支援分野も変わりつつあります。結局、その根底にあるのは、人間の自立と尊厳の問題です。みんなが対等の立場で、そ



堀田力 (ほった・つとむ)

1934年生まれ、京都府出身。さわやか福祉財団理事長。弁護士。京大法学部卒。61年、検事任官。大阪地検特捜部検事、東京地検特捜部検事、法務大臣官房長などを経て、91年、退職。同年、さわやか福祉推進センター開設(95年、さわやか福祉財団に改組)。2010年公益法人化。福祉、教育、社会保障などのさまざまな委員を歴任。「新しいふれあい社会の創造」を目指し、精力的にボランティア育成、ネットワークづくりに取り組んでいる。



さわやか福祉財団が推進する事業の一つ「放課後子ども教室」の様子

れそれぞれができることをやりながら、自立を助け、尊厳を持って生き生きと暮らしていただくために支援する、それがボランティアです。
絶望を希望に変えるボランティア
細川 4月初めに今回の東日本大震災で被災した福島県南相馬市の友人を訪ねたのですが、本当にひど

い状態でした。海岸線が延々と全滅状態で、これで果たして復興できるのかしらと、暗澹たる気持ちになりました。その場に立つと、もう人間がつぶれそうなんです。どのように言葉をかけていいのかわかりませんでした。
堀田 震災直後は、とにかく命を救うことが最優先。それから仮設住宅

や移転先での暮らしが始まるまでは、命を維持していくことに全力をあげなくてはなりません。そこまでは、医療関係者、自衛隊・消防・警察などが中心となって復興を支え、ボランティアはその隙間を上手に埋めて手伝うのが役割。そこから先が、本当にボランティアの出番です。まず、現地で被災された方のお話を聴くというのが大切です。みなさん、被災者ですから、お互い同士では遠慮して自分の気持ちを言い合えない。子どもからお年寄りまで、恐怖、悔恨、自責など、胸に抱えたものが大きいですから、そこをじっくりと聴くことで、まずは気持ちを表に出していただく。すると、少しは元気になって、自分も被災者だが、周囲の困っている人と助け合いながら、一緒に町を復興していこうという希望が生まれる。そうなれば成功なんです。そのようにして、絶望から希望につなぐ作業が必要です。
細川 やはり、将来の展望が見えないということが、苦しみの最大の原因だと思えます。みなさん、生まれ育った町に帰りたいという気持ちは痛いほどわかりますが、現実問題として、帰れない方が大勢出てくる状況であることは確かです。そうした方々に、仕事を含めて、移転先でどう暮らしを営んでもらうか、行政やさまざまな団体が、本気で取り組んでいかなくてはならない。

堀田 故郷に帰れない方々を、移転先でどう受け入れ、地域社会に溶け込んでもらうか、それが今回の大震災で出てきた新しい問題です。被災地での復興を手伝うボランティアと、被災地からやって来られた方々を受け入れる日本各地のボランティア、その両方が必要になります。

細川 堀田先生のところの「さわやか福祉財団」は日本全国にネットワークがありますから、それを横につないで、ぜひ、そうした支援をしていただければと、私のほうからもお願いします。

ともにコミュニティに 生きるものとして

堀田 そういう意味では、全国の遊技事業者も先頭を切ってがんばってほしい。まずは、本業のサービスで地域社会に貢献する。パチンコなんてとんでもないという人もいますが、日ごろのストレスを解消する息抜き場というものが地域には必要です。業界には、その一翼をしっかりと担っていただきたい。そして、ボランティアをはじめとするさまざまな社会貢献を通じて、この震災で被災された地域のコミュニティの復活を支えてもらう。せっかく人が集まる場所なので、お客様同士が語り合って新しいつながりが生まれるようなスペース、そんなものもこれからは用意してもらえればと期待しています。



細川 「世界の子どもにワクチンを日本委員会」でも、遊技業界のみならず、さまざまな方々にご協力をいただいています。企業や店舗として、ただ儲かればいいという発想ではなく、自分たちもコミュニティの一角として存在しているのだということを常に考えて行動してくださっているのだと、感謝しております。コミュニティには健常者ばかりではなく、お年寄りもいらっしゃる、体の不自由な方、障がいを持っておられる方もいる。そういうすべての方々が、心温かく日々を過ごせるような社会貢献、地域貢献を考えて、これからもいろいろなことに取り組んでいただ

けたらと、切に願っております。

堀田 たとえば、今回の大震災では、大きな車にパチンコやスロットを積んでいって、避難所や仮設住宅のそばで楽しんでもらうというような方法も業界として考えてもいいと思いますよ。

細川 これまでも日本人は、幾多の大災害を乗り越えて、見事に復興を果たしてきた民族です。いまこそ、連帯や絆といったものが試されているのだと思います。お互いさま、お陰さまといった助け合いの精神があれば、必ずや立ち直ることができると思います。

[対談実施日：4月4日]